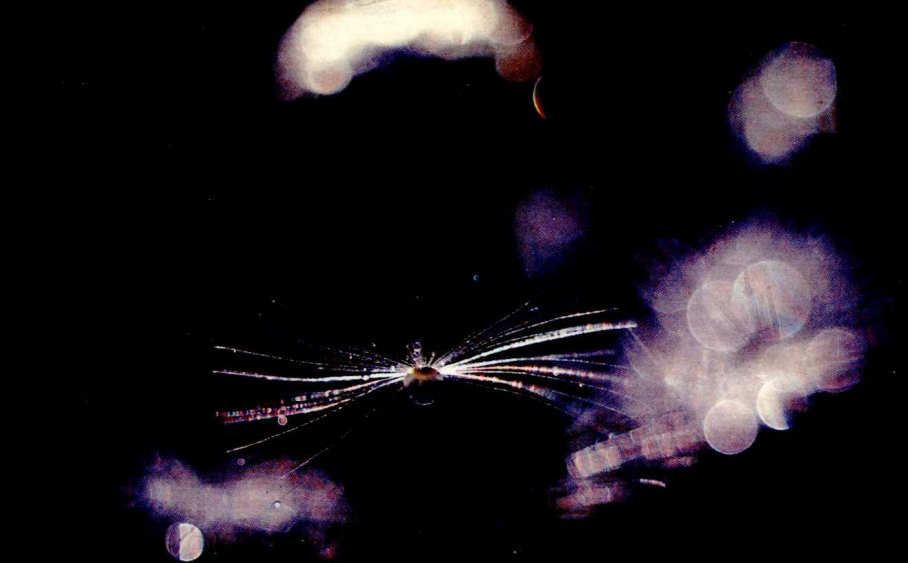




# 大地の女たち

mukai shōko

## 向井承子

# 大地の女たち

向井承子

---

著 者 紹 介

---

向井承子（むかい・しょうこ）

東京生まれ。1961年北海道大学法学部卒業。現在ルポライター。

著書に『わたちの同窓会』（JICC 出版局）『小児病棟の子どもたち』（晶文社）などがある。

---

大地の女たち

---

昭和57年 6 月 1 日 第 1 版発行

著 者 向 井 承 子

発 行 者 来 馬 希 木

発 行 所 社団法人 家の光協会

〒162 東京都新宿区市谷船河原町11

電話 東京 03-260-3151（大代表） 振替東京 5-4724

印刷 三松堂印刷 K K 製本 寿製本 K K

---

落し本や乱丁本はおとりかえます  
定価は表紙カバーに表示してあります

© Shôko Mukai 1982

Printed in Japan

5036-54313-0301

目次

|               |     |
|---------------|-----|
| 農を問う旅……………    | 3   |
| 土にいのちを紡ぐ…………… | 23  |
| 野を拓く……………     | 143 |
| あとがき……………     | 247 |

装  
丁

菊  
地  
信  
義

農を問う旅

列車は苦しげに唸りながら山を登っていた。窓ガラスの外は、まだ夕刻には遠いというのに淡く墨をぬりこめたようにほの暗い。重く湿った雪が、あたりの光を吸い尽くしながら山を埋め、沿線の杉に覆いかぶさる。灰墨色の世界をむりやりに分け進むような列車の窓ガラスには、みぞれなのか、シャーベットを投げつけたような大粒のぬれた雪がへばりついては、斜め後ろに向かってつうとすべり落ちていた。

上野駅を四時間ほど前に離れた秋田行の列車は、山形県の米沢にさしかかっていた。このあたりから季候はいつも突然に変わる。夏ならば、山あいを霧が急に湧きのぼるかと思うと、しのつく雨がにわかには車窓を洗うこともある。

昭和五十六年十二月四日。赤茶けた枯れ野が走り去るのをみながら、効き過ぎるほどの暖房にうたた寝をし、ふと目覚めると、重い雪に覆われた真冬が窓外にあった。

奥羽本線を米沢で米坂線に乗り継ぎ、小一時間も走り、さらに長井線に乗り継ぐ。終点荒砥に着いたときは、あたりは漆黒の闇に包まれていた。

客が数人降りただけの古びた駅舎は半ば雪に埋もれていた。

タクシーが一台待っていた。

「蚕桑地区公民館をお願いします」

クルマは、闇の中へ動き出した。

暗い。空は漆黒である。地上は道の両側に盛り上がったように除雪された雪がまるで白い壁のよう、壁の切れめからは、白々と平地がのぞく。闇と雪原の白さの輪郭は明瞭ではなく、手漉きの和紙に描いた墨絵のようにおぼろおぼろとした無彩色の世界が、家も人も吸いこんで広がっていた。クルマは、橋を渡っているようだった。たぶん最上川<sup>もがみがわ</sup>だろう。この地域は置賜盆地<sup>おきたま</sup>とよばれる。三方を丘陵に囲まれて、その中央を最上川が流れる。

闇と雪原の世界は、春から秋にかけてのこの地とは、まるで別の表情をみせていた。

五十六年八月末。私は荒砥駅のホームに立って、景光の美しさに息を呑んだのだった。単線の線路際からすぐ、水田が山に向かって広がっていた。盆地の周囲には千メートルを越す山なみが連なっている山々はまるで盆の縁のようで、はるかな稜線は鈍い藍色に覆み、田んぼとの境めをつくる。近くの山々は濃緑色で、暗い杉林が山すそを縁どり、台風が去ったあとの空には、うっすらとうろこ雲が描かれていた。稲穂は初秋の陽ざしを受けて、つやつやと緑色にきらめきながら突き立ち、さらに濃い艶<sup>つや</sup>やかさで盛り上がる畑は桑畑だった。稲穂の上を横ぎってすずめ除けのテープが風にゆれながら、青く赤く輝く。都会者の、土を知らぬ感傷と、おそらくは侮蔑<sup>よべつ</sup>されようが、いのちを育

む景色は、都会のコンクリートの地下道や、そこに土がないばかりに、吸いこまれ土に帰すことのないまま染みついていく酔いどれのへの跡や小便のシミよりも、やはり美しい、と思わないではいけないのだった。

だが、それは同時に、水田と畑のこの静けさはなんなのだろうと、いぶかしがらせる光景でもあった。田も畑も、実に整然と美しく、すずめ除けのテープもきらめきゆれているのに、その光景には人間が見当たらない。見渡す限りの田畑なのに、そこに働く人の見えない光景は、少し昔の農の風景を見知っている者にとっては、まるでSFの世界のようである。ひき抜く草もないのか、虫もないのか。降りそそぐ陽の下での田畑は、動かない美しい絵のようで、生の実感が漂わない、プラモデルのようにさえみえた。

男も女も、どこへ行ったのだろうか。

かつて、古色漂う家族とむらの中で、若い夫婦にとって、野良は唯一、生命を燃やせる場だったという。

「野良が、新婚旅行だったなす。家ん中は開け放しでよ、しゃべればしかられるし、睦むことなどなかったもんなあ」

稲が実り、野菜が育ち、家族の眼から逃れた新しい夫婦が恥じらいがちにことばを交わし、心を通わせていく。農は、天地自然に忠実な場だった。

雪道の向こうに灯りが近づいてきた。白い雪原の中に真新しい建物が浮き出す。

「ここだよ」

雪の中に降りると、冷えているのか、靴が雪を踏んできしんだ。

「白鷹しらたか農村婦人問題研究会会場」

白い紙が貼り出してある。

ガラス戸を開けると、たくさんの履き物がある。小さい子どもの履き物もある。夜も七時になる。たぶん、集まっているのは若い嫁たちのはずである。夜の会合をもつまでには、それぞれの家での、小さい葛藤かつどうもあったにちがいない。

加藤美恵みえが出てきた。三十四歳になる農家の若い妻、美恵とはこれではほぼ九か月めのつき合いになつていた。

「どうもご苦労さんです。こんな遠いところまで。よく、きてくださって」

「いえ、お手紙をいただいて、うれしくなつたもので——」

「ついに、集まりもつところまでこぎつけたというところだけんど。きょうは、見ていてください。それにしても、手づくりのカレーがありますから、どうぞ」

大盛りのカレーを、私ははおぼった。米はもちろん、野菜も、リンゴも、肉も、全部仲間たちが耕し、育てたものばかり、と美恵は教えてくれた。口に入れると、とろりとうまう、米は粘っこい。

「もちろん、どれも堆肥で育てた、クスリ使わない野菜ばかりだし……」

「このリンゴも、うちでつくった日本一のリンゴですよ」

若い女性がリンゴを持ってきた。青みがかった白い果肉はさくさくと、ほどよく固く、甘ずっぱい。都市の店先からは失われた味がある。

今夜は白鷹農村婦人問題研究会の発足の夜だった。加藤美恵はその世話人のひとりである。農村女性の生き方を考えてみたい、という願いが三十代の若い妻たちの間で生まれてからおおよそ五年めだった。

昼間は農作業があり、夜は子育てや家事がある。農村の女ほど忙しい日々を過ごしている女性はいないのではないかとさえ思われる。大家族がふつうだから、嫁姑のまきつなども日常的だ。都会からテレビなどを通じて洪水のように寄せてくる女性論を見聞きすると、なにか決定的なちがいがあろうのだった。

もし、都会ならば、生きがいや経済的自立のためならば、とりあえず外に働き場をみつけてみようかという発想が成り立つ。そのような女性論がマスコミなどを通じて農村の茶の間にも送られてくる。

しかし、いま農村で女性のことを考えるのには、そう都会的な発想にふりまわされてはいられなかった。

もし、女性が一步外に出てみるとしよう。農村にも「農工一致路線」とか「就業構造の改善」とかの名目で、手輕な働き場が、どんどんやってきている。自分の金をいくばくかでも手にしようと思えば、外に出るチャンスはいくらでもある。農業だけでは食べられず、出稼ぎが年中行事のようになつてきたこの地では、主婦たちが工場などに働きに出るのは、家族からもむしろ奨励されるのも少なくないと聞く。ともかく現金収入をもってくるからである。

工場に働きに行つていれば、たとえば一日中、嫁姑が顔をつき合わせていることもなく、まさつの解消にもなる。家庭電化の方は、すっかり整えられた昨今だから、一家に主婦は二人要らないのである。さらに、同じ世代の主婦たちと年寄り抜きで出会い、語り合う機会にもなる。

たしかに、一石二鳥というか、実にいいことづくめに見えるのだった。農業も最近では近代化されて、そう手間ひまがかかるわけでもない。機械とクスリに頼っている農業では、毎日田畑に行つても、一日中する仕事などないのである。

農業は実に重労働だった。それでいて、金にもさっぱりならなかった。テレビから送られてくる都会の光景は、実に気楽そうで小ざれいに見えたものだった。電化し、近代化して労働を楽にし、家事を合理化して、少しは身ざれいにして、化粧もし、時にはそのまま蒸発してしまう妻がいたとして、なにが悪かろう、と私自身思つてきた。都市のインテリが編集するマスコミは、口を開けば、都市近郊農家をあざ笑いの種にして、シャンデリアにステンドグラス、と書き立ててきたけれども、

それですら、大きなお世話ではないか、とふと思ったりもしていた。農民が自分の金を自分のために使う。農民自身がその使い道の貧しさに気づくのならともかく、農村をふみにじってきた都市の人間がとやかくいう筋合いはない。シャンデリアを売りつけ、土地を買いつけたのは、だれだったのか。

だが、美恵たちは、山あいのむらの中で、いまの農村の女性の上には、容易ならざる時代が押しよせていることを敏感に感じとっていたのだ。

農業に生きる女たちが、農業を衰えさせる方向に生き方を探っていくとしたら、それは大変な方向がいではなからうか。旧い家に縛られないで、しかも、いい農業のない手となる方法は――。田畑が雪に埋もれ、農閑期といわれる時期を、美恵たちは自分たちをみつめる時間に使おう、と思いついていた。

会場の和室には三十人ほどの若妻たちが、コの字型に坐っていた。この会の外向けおひろめともいう第一回の今夜は、作家の一条ふみさんとの語り合いの時間にあてられていた。

農村に住みつきながら、土に生きる女たちの姿を描き続けてきた、まるで泥で練り上げた人形のような顔の一条さんが口を開くと、会場は静まった。

「女とは大地です。女はすべてのものを享受して浄化し、再び芽ばえさせるものと思ってきました。ところが、いま、女はその力を失っているのです。まるで大地が汚れ放題で、汚れを浄化できる微

生物のバランスが崩れているのと同じように。これ以上は耐えられないところまで土は弱っています。

かつて、女は嫁にいつて死産や流産をすると女のせいといわれてきました。大地が弱っていると、作物も死産・流産します。農薬、機械、重労働でバランスを崩した女たちのからだも、いまの大地と同じです。流産が増え、子どもたちが弱っています。女たちも、いのちを生むことから逃げ、ためらいがちです。いのちを生み出す女たちが大地を考えないで、だれが大地のことを考えられるのでしょうか。モノとりの思想から離れて大地の思想に立って、女のからだがバランスできるように農業をつくり出さないかぎり、農業はほろびるでしょう……」

女たちの表情が紅潮していた。一条さんが口をつぐむと、すぐに問いかけや、語りが、たどたどしく、あるいは雄弁に始まった。

「農薬を、私ら自身も使いたくねえです。しかし、使わねえと虫が喰ってくのよね。これ、どうしたらいいのか、わからねえのです。それに、うちだけクスリ使わねえちゅうわけには、いまのむらはいかねえのです」

「いまの状況の中では、九十八戸までしていることに一軒だけ反対すると、お前ひとりだけがつて恨まれる論理が農民ん中にはあるんだな。でもよ、その論理が農民を企業の言いなりにしてるんだな。ローラーかけやすい存在なんだな。おれ、ごしゃげて、ごしゃげてよ……」

「ほんとに強い土だったら、虫にやられないはずなんですよ。虫がつくのは作物が弱ってるのです。なによりもまず、大地を、土をもとに返すことが要るんです」

一条さんがことばを返した。

一条さんはいま、開拓地に入って開墾しているという。

「開拓地の土は、まだ汚されていない宝のような土だから」という。

か細い女性が立ち上がった。背中では、乳のみ子が火のついたように泣いていた。からだをゆすり子どもの尻をトントンと叩きながら彼女は語り始めた。東京から、この地に農業をするために移り住んだ桜井きぬ子さんである。ことしで四度めの冬を迎えた。だれもが、一年で逃げ帰るだろうと眺めていた五人家族の主婦だった。

肌は陽ざしと土に焼けている。

白鷹しらたかの町で行き会う農家の主婦よりもっと土臭くなっているのに、表情は都会的に見える。

「都会から白鷹にきて驚いてるのは、この土地のみんなが工場に行つてせかせか働いて、家の中では、添加物の入ったインスタント食品なんか子どもに食べさせていることなんです。みんながせかせか働いて貧しさを補ってるつもりなんだろうけど、白鷹町は貧しい貧しいと、みんなが口を開けばいつてくれるけれども、貧しいってなんだろうと思うんですよ。もう都市は絶望的なんです。都市の人間は物質文明をひたすら維持するために働いている。その都市を脱出して白鷹にきたつもりな

んですけど、白鷹町がどんなその都市に近づいてる気がしてならないのです。

そりゃあ、お前、百姓はしろうとで、たかだか一反五畝で自給をめざしているぐらいでなにいつてるか、といわれるんですけど、私はここで農業たっぶり使って作物つくっている人を見ると、それでほんとの百姓かって言い返したくなるんですよ。

でも、そうはいいいながらも現金収入はほしいんです。電気つけるにも電話ひくにも金がかかるんです。すると、現金収入の道を考えます。豊かになりたくて白鷹にきたのに、悪循環あくじゆんかんをくり返して自分しかないんです……」

「親たちの話を聞いてると、昔はつらかった、それに比べるといまはいい、という。戦争もない。飢餓もない。火をたくにも難儀して、薪背負ってきた。お前たちは幸せだといわれると、自分たちにそういう体験はないですから、そういわれるとそうかな、と思ってしまふんですよ。いまを問題にしようとする気持ちまでが萎なえてしまう」

「いまは危機が見えないから深刻なんだね。ただ、あったかく暮らそうと思うだけのことが、原発や石油文明につながって地球を蝕むしばむことになる。危機が見えてからでは遅いんだけど。農業だってそうなんですよね。底の方でつながっていて、根もとから崩れているのが見えなかったりする。いま、私たちが一番見なければならぬのは土なんでしょうか」

それぞれの発言は、ほとんど、相互の脈絡みやくらくもなく、思いのたけが口からこぼれ出すように続いて

いた。語り始めてから口ごもる者もいたし、思いを表現できずにじれる者もいた。そのじれっさや、脈絡のなさが、むしろ、語ることを閉ざされてきた女たちの、生活の中でふくれ上がっていた思いの重さをきわだたせていた。

会場の制限時間は九時までだった。残れる者たちは加藤美恵の家へ場を移し、夜を徹して語るつもり、という。

外は、みぞれがしのつく雨に変わっていた。暗い夜道を、一行よりも一足先に加藤家に向かった。納屋と牛舎に向かい合う玄關を開けると、美恵の夫、秀一しゅういちが、まだようよう二歳になったばかりの四番めの子ども、末子の崇穂たかしを抱いて出てきた。

「子もり当番ですか」

私が声をかけると、秀一は土に焼けた顔をほころばせた。

「んだ。かあちゃん、がんばってっからよ。こっちは、別になにもしてやれねえどよ、せいぜい出やすいようにしてやるだけだな」

半ば照れくさげに返事をする、秀一は、石油ストーブに火をつけた。

「もうそろそろ、来っころだべ」

練炭ごたつが、座敷の中央にあった。足を入れる。一時間以上前から暖めてあったのだろうか。まるでたっぶりの風呂につかったようなぜいたくな暖気が足腰を包んだ。